

研究課題：本学ネット環境下での効果的なオンライン教育の構築と教育効果に関する研究

本研究は研究代表者と研究分担者が本学人文学部で担当する多様性に富んだ科目（大規模受講者講義、少人数での実習、演習、語学）での実際の授業を介して、2020年4月時点での限定されたネット・インフラを通じてなされる遠隔教育にどのような問題点が内在しているか、そして限られた資源の中から教育の最適化を図るためにはどのような方策が取り得るかを探求し、そこから教授法の一定の規範化を図ることを目的とした。本学部における遠隔授業への全面的な移行は従来から策定されたアジェンダに基づくものではなく、コロナ禍という外的要因によって不随意的に履行されたものだったことが大きな特徴である。そうした環境下で発生する諸問題を記録しその要因を明確化するための情報を蓄積することに研究意義があると考えたことが、本研究の元来の発想であった。

研究方法としては研究採択から後期終了までの学期期間中、毎月計6回にわたって研究会をバーチャルに開催し、研究代表者と研究分担者が担当する科目で発生している問題点を抽出し、それを範疇化すると同時に最適の対応策を探った。ここには教育の双方向性の確保やランダムに発生する受講生のネット環境の不備への対応、公平で合理的な成績評価への模索などが含まれる。また2020年4月以降に導入された新しいアプリケーションの問題点の洗い出しや最適の使用法に関する議論も研究会の議題となった。

本研究で得られた知見のうち特徴的なものを2つ報告しておく。

まず他大学で発生したようなイントラネット内の基幹LMSの機能不全は研究期間中には見られなかった。しかしこれは必ずしも全面的に歓迎すべき現象ではない。というのも基幹サービスへの負荷を分散すべく複数の外部サービスに依拠したため、受講生は科目ごとに、もしくは単一の科目内で複数のアプリケーションを使用することを強いられ、徒な混乱を惹起したからである。しかもすべての場合基幹サービスをゲートウェイとしてそこから外部アプリへ誘導したため、受講生側からすると複数のサービスを渡り歩いているという意識が低く、そのため特定のアプリの使用法でつまずくと自主的に解決策に到達できないという問題が発生しがちであった。遠隔教育では受講生がなじみやすい操作法を単純化した統合型サービスが最適であるのは改めて指摘するまでもないが、一方でかねてから対面型で設計されてきた教育を一斉に遠隔へと移行するためには、何よりも基幹サービスを機能不全に陥らせないことが大前提であり、こうした二律背反は解消できないまま現在も持続している。平時から本学の装備するサービスに在学生在が習熟するよう全学的な教育を行っておくことが最善の解決策と考えられるが、開講する科目すべてがそれらのサービスを網羅的に利用するとも限らないので、学生に対して不要な技術の習得を強制することにもなりかねない点が問題として残る。

二つ目は公平で合理的な成績評価の問題である。遠隔教育では毎回課題を課し、その結果から判明する理解不足の著しい箇所を続く回以降に補足説明して回復処置をとり、これらの段階を経ながら到達目標へと至るという方式が、双方向性確保の観点からも、また学習を習慣づけ易いという点からも望ましいことは改めて指摘するまでもないが、これには不可避免的に完全に回答者を受講生と同定できないという問題が付随する。つまり代理人受験を排斥できないのである。また課題結果を累積することで成績評価の参考にするような場合、例えば小テストといった形式で課した課題の正解が、授業担当者の確認し得ないところで交換され、結果的に公正な評価を妨げることとなるという問題を未然に防ぐことは、遠隔授業という形態上著しく難しい。これを回避するためには綿密なルーブリック表に基づく課題を用意し、成績結果を統計処理するのが手法上最適であるが、これが可能となるような科目全体の厳密な単元化ははたして人文学教育に適するものであるのかに関しては、今後も検討が必要であろう。